

青春群像 さようなら六本松 : 一九二一福高一一九
大二〇〇九

九州大学さようなら六本松誌編集委員会

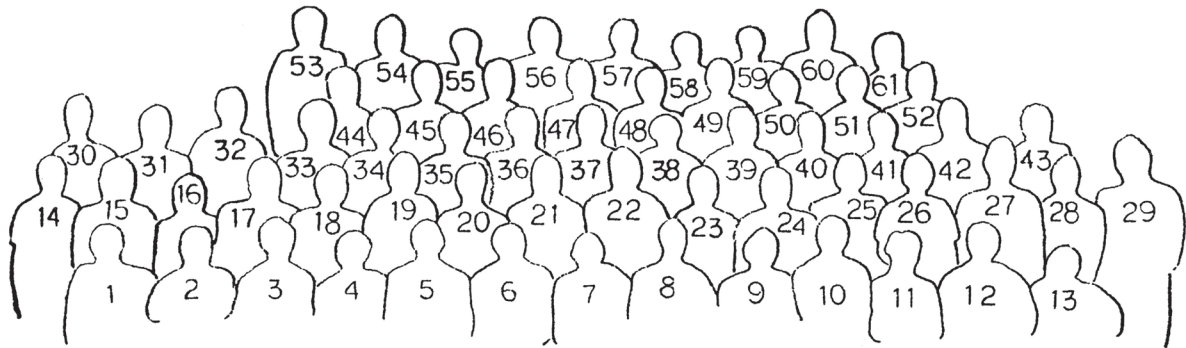
<https://hdl.handle.net/2324/17867>

出版情報 : 2009-02-10. 花書院
バージョン :
権利関係 :

第五章
旧教職員たちの回想



平成7年度 九州大学六本松地区 松友会(第18回) 7月21日 於 KKRはかた



- | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|----------|----------|----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|-----------|----------|-----------|----------|-----------|----------|----------|----------|----------|
| ① | ② | ③ | ④ | ⑤ | ⑥ | ⑦ | ⑧ | ⑨ | ⑩ | ⑪ | ⑫ | ⑬ | ⑭ | ⑮ | ⑯ | ⑰ |
| 中村
正夫 | 江嶋
寿雄 | 西原
忠毅 | 毛利
浄賢 | 野田
光雄 | 岡田
武彦 | 問田
直幹 | 大久保
正夫 | 千代
正一郎 | 近藤
誠造 | 野田
ハル | 青木
重種 | 小野
昭 | 大神
義生 | 長澤
明俊 | 因幡
良隆 | 西嶋
巖 |
| ⑱ | ⑲ | ⑳ | ㉑ | ㉒ | ㉓ | ㉔ | ㉕ | ㉖ | ㉗ | ㉘ | ㉙ | ㉚ | ㉛ | ㉜ | ㉝ | ㉞ |
| 猪城
博之 | 安東
毅 | 村瀬
一郎 | 松本
寿吉 | 谷口
裕 | 上野
清太郎 | 上田
幾彦 | 竹田津
富次 | 深山
喜一郎 | 赤間
八郎 | 渡辺
一生 | 福留
久大 | 深江
宇志夫 | 空閑
龍二 | 児玉
哲夫 | 中野
行人 | 衣笠
哲生 |
| ⑳ | ㉑ | ㉒ | ㉓ | ㉔ | ㉕ | ㉖ | ㉗ | ㉘ | ㉙ | ㉚ | ㉛ | ㉜ | ㉝ | ㉞ | ㉟ | ㊱ |
| 橋口
保夫 | 戸次
亨 | 吉川
清士 | 鶴田
清美 | 南里
小平次 | 八尋
正 | 阿武
聰信 | 江藤
義太 | 逢坂
収 | 武末
尚文 | 松尾
敬次郎 | 志垣
嘉夫 | 原田
溥 | 小島
恒久 | 小田
盛長 | 龜田
卓夫 | 高橋
實 |
| ㊲ | ㊳ | ㊴ | ㊵ | ㊶ | ㊷ | ㊸ | ㊹ | ㊺ | ㊻ | | | | | | | |
| 白水
隆 | 吉野
昌昭 | 野口
健司 | 緒方
道彦 | 後藤
賢一 | 藤江
義明 | 足利
晋 | 八尋
重治 | 深見
輝己 | 江口
正 | | | | | | | |

六本松を想う

九大名誉教授 園田 久

教養部のあった場所がまだ大坪町一丁目と呼ばれていた頃の旧制福高に非常勤講師として初めて足を踏み入れたのは昭和十九年九月のことであった。若い学生に物理学を教えることの難しさと面白さを感じ始めた二〇年六月一九日の夜、福岡市はB29の大空襲を受けた。六本松の西約二キロの所に住んでいた私は市が全滅したと思っただけで、翌朝福高正門まで辿り着いたら、そこには折竹錫校長がすくと立って居られ、『お蔭で学校は無事でした。明日からもよろしく』と力強く挨拶された。六本松から大濠公園へと抜ける途中は所々で遺体を焼く煙が立ち登っていた。保険局の傍らには黒焦げで小さくなった遺体が転がっていた。下川端町では銀行地下からまだ煙が吹き出していた。二百人ほどの市民がそこで犠牲になったことを後で知った。呉服町から東は全く無傷であった。九大も無事だったので、それから暫くは荒江から箱崎までを毎日徒歩で往復しなければならなかった。

九大理学部の物理学教室は大分県の豊後森に疎開したが敗戦後は再び福岡へ戻ることになった。二〇年夏の終わり頃、折竹校長に挨拶に伺ったら、『留学生の為に建てた南寮が空いているので是非入って欲しい』と言われたので、南寮開拓者のつもりで妻と二人で住み込んだ。ところが何日か経った日曜日に米兵が五人室内に軍靴のまま入って来たではないか。辺りには誰もいない。心臓が飛び出るくらい驚いたが、『私はこの学校の先生で、物理学を教えている』と言ったら、中の一人が『俺はそれを習ったことがある』と答えて得意そうな顔をした。そこで書棚から洋書の一冊を取り出して見せたら、彼はフンフンと頷いていたが、やがて辺りを検分した後、全員静か

に帰って行った。真に恐怖の何分間かであった。其後しばらくしたら南寮は先生達八人の家族で一杯となった。ところで私の子供二人は南寮で生まれたので大坪町一丁目出生と戸籍に記載されている。

戦後の学生の熱心さの例を書いてみたい。福高二二年卒の上田顯、廣渡幹彦、吉住博之の三君からは求められて殆ど毎日指導した。剛体の三次元回転という大学程度以上の力学まで学んでもらい、当時流行中の逆立ち独楽のことを調べた。応用として茹で卵を机上で早く回すと、より細く尖った方を下にして立ち上がって回転するであろうという予想のもとに、冬休みを潰して実験して貰った。立ち上がって回転するのは確かだが、より細かい方を下にする確率は六〇%を越えなかった。学舎報告とまでは行かなかった。吉住君と廣渡君は惜しいことに夭折したが、上田君はいま京大名譽教授である。私がまだ五高生であった昭和一四年に白杵の石佛の写生に行ったことがあった。その時の二日間に見物に来たのは唯一人、福岡からの若い画家の方だけであった。数年経った後のある日、上田君が突然『あれは兄でした』と言われたのには、大変吃驚した。然し兄上の上田宇三郎画伯も残念なことに若くして亡くなられた。

南寮を出て近くに家を建てたので、何か事があると必ず真っ先に呼び出された。昭和四四年三月の入試の初日、教養部が学生達に占拠された。早朝に呼び出され、新試験場と変わった英数学館に連れて行かれた。大問題となっていたのは、厳封された問題用紙の袋の数とそれらに入った枚数を新試験場のそれらと整合させる必要があるということであった。僅か数個の袋だけを開いて調整すれば済むという私案を述べたら、直ちに採用されてしまった。後には事務の方々と私の大奮闘が残った。お蔭で昼の差し入れ握り飯も夕食も全く頂く暇がなく、長浜の教養部長だと冷やかされただけであった。ところで五四年間も続いている母の合唱団コーロ・マドレの指揮のため、今でも毎週木曜日には教養部の横を通っている。六本松とは仲々縁が切れない。

九大祭と水素ガス

名誉教授 中村 周

私は昭和二二年二月から理学部分析化学教室齊藤信房先生の許で助手として研究のお手伝いをしておりました。ところが先生は優秀な研究者でしたので、昭和二四年九月先生の出身母校の東京大学理学部化学科の助教授として転任されることになりました。当時日本は占領軍のGHQのシャウプ勸告で経済界は言うに及ばず教育界も大混乱に巻き込まれ、旧制高等学校はほとんどが新制大学として生き残ることになりました。後に残される私のことを心配された先生は九大分校として生き残った六本松の福岡高校の講師として推薦して頂きました。それから五九年三月の定年まで三四年六ヶ月大過なく無事に勤めさせて頂くことができました。

しかしながら今年七月の誕生日で八八歳を迎える私にとって六〇年も前のことなど記憶も定かならずですが、思い出すことを幾つか書いてみましょう。



九大教養部

着任当時正門前から北の方をみますと西公園や女子師範が何の遮りもなく見えていました。三月下旬になると北側の通りに面して植えられた四本か五本の桜が大きく広げた枝に見事な花を咲かせていました。昭和五年頃植えられたものだと古い職員が言っていました。着任当初はすべての建物が木造で



したが、やがて次第に鉄筋コンクリに変わっていききました。化学教室はまだ木造だった頃サークル化学部に部室を貸していたのですが、ある日部室に行ってみたところ部員たちが熱心に幅2cm、長さ1mほどの竹籤(たけひご)で直径1m50cmほどの中空の球体をつくり、外側に薄い紙を貼り付けていました。何をしているのかと尋ねたところ部員曰くこの中に水素ガスを詰めて学園祭で火を付けるつもりだということです。こちらはびっくり、そんな危ないことは絶対してはならないといい、私は化学部顧問の村瀬先生を呼びに行き先生に事情を話し部室に行ってもらい事なきを得ました。ちなみに化学部員は女子学生が大半で日曜になると毎週のようにピクニックに行っていましたので、君たちは化学部でなくピクニック部だと冷やかして居りました。道路に面した北側に沿ってどぶ川が流れ悪臭の元になっていましたし、ときには自転車ごとどぶ川に突っ込む人も出たりで、市が三〇年頃暗渠工事をしてくれましたのでそのような被害はなくなり道路も広くなりました。

左端角帽を被った学生の右側後ろ姿が小生です。さらに右側に見える家族づれの方は平田先生の家族で平田先生はバスを降りた後お子さんを抱いてここまで上ってこられたので先生は汗ビショリで別のところで体を冷やしておられたのでしょう。ここは野北牧場と呼ばれたところなのですが、来てみれば牛は一匹も居らず居たのは馬ばかりで期待していた皆さんがっかりでした。昼食後一時間くらいで幹事が今日のハイキングはこれで解散にしますので麓まで降りて下さい、ただし学校まではバスで送りますのでということで再びバスに乗りました。実はこれには訳があり幹事役の人は西鉄ライオンズに知り合いがあり、このバスはライオンズの選手を運ぶためのバスを拝借して時間がくるまでということだったのです。しかしまあ無事に学校に帰着できました。

回想

名誉教授 村瀬一郎

九大発展の一環のこととは言え、六本松キャンパスがなくなることは私たちにとっては誠に心残りである。此の際に教養部化学教室の歴史を綴っておくことは、残されたものの責務と思い回想と共に記すこととした。

昭和二六年五月九大理学部化学科大学院特別研究員後期学生から、九大第一分校に化学の講師として赴任したのが私の六本松生活の始まりで、新制大学発足から三年目にあたる。当時化学教室には故西川、中村（現名誉教授）、故平田の三先生と助手の清水君、紫藤事務官（理学部退官）、故進藤補佐員がおられた。清水君はまもなく新潟大学に転任して安東さん（現名誉教授）と代わった。建物はずべて旧福岡高等学校の木造校舎であった。初めての講義として「一般化学」を担当させられたときは経験もなく苦労した。まもなく久留米にあった第二、第三分校が六本松に合流し、故林、故一井、故坂口、阿武（現名誉教授）の四先生と高橋助手（久留米高専教授退官）、故赤司、故東内さんらが教室員として加わった。二号館だけでは手狭になり三号館を譲り受け、物理教室は校庭側に新築された。私は三号館に二部屋を頂いた。昭和三〇年頃今の二号館の半分が新築され、その後継ぎ足されて現在のかたちが完成した。その間にまず竹田津講師（現名誉教授）が赴任され、小谷（九大本部退官）、故小田君が教室員として加わった。以後、私の定年（平成元年）までに在任、転出された先生方を列挙すると、梶返（山口大名誉教授）、金品（徳島大名誉教授）、鈴木（金沢大教授）、山下（東北大教授）さんなどがある。また故出村教授、故金富（名誉教授）、立田（現

名誉教授）、故井出教授、小山（現名誉教授）、川東（理学部教授）、吉村（理学部教授）、竹原（理学部助教授）、横山（理学部教授）、山田（現工学部教授）、野村（理学部助教授）、柴田（現長崎国際大学）、山中（理学部助教授）、武村（現高等教育総合開発研究センター）、林事務官（退官）、阿部事務官（退官）、松尾、森口の両技官の諸君が在籍されていた。赴任してしばらく経った頃、学生諸君の化学部（化学クラブ）と写真部が設立されたが、これら部員の諸君（卒業生）とは今でも深い交流を持っている。私が教室の皆さんに最も感謝したいことは、度重なる外出を許可して頂いたことである。最初は昭和三七年九月より二年間 Chicago の I.T. (Illinois Institute of Technology) の A.E. Martell 教授のもとに研究員として留学、その後先生が College Station, TX (Texas A&M Univ.) に移られて、昭和四四年以来数回に亘って一年乃至二〜三ヶ月の留学をさせて戴いた。このことは私の研究活動に大きくプラスになった。他に思い起こすことは、木造の学生実験室の火災で天井部分がほぼ焼け落ちたことや、合成実験中に原料のイペリット（毒ガス）による両手の大やけど、その傷あととは今でも残っている。またガラス管の派差による怪我（左親指の爪は今でも割れて出てくる）などがある。故石中教授（独語）との出会いも印象に残る。先生には旧山口高校在学当時に指導を受けた。また理学部の恩師妻木先生と西川先生と三人で毎週有機化学の教科書作りを行った。この作業は二〜三年続いたが、妻木先生のご定年で中断した。しかしこの仕事は講義のために大変役立つ。私は化学を愛し、自由な研究の環境を与えて頂いた六本松の生活に満足しているが、講義は苦手で、自覚しているとおり下手である。無事定年を迎え得たことは教室の皆さんの温情のお陰と感謝している。終わりに九大の更なる発展と充実に祈って筆を擱く。



昭和 27 年夏（大原先生は 27 年 4 月に赴任。永井主事はこの年夏に辞職。隣に後任の牧川主事がいる。主事交代時の記念撮影か。ただし写真の裏面には「25 から 26 年 5 月以前の第一分校教職員、旧図書館前」とある。最前列左から 2 番目後藤、つぎは、石中象治、吉井権雄、一人とんで永井主事（いかめしく、ひげ、前で手を組む）、後任の牧川主事、山崎、一人とんで茗荷、岡崎次郎、前から二番目の列 3 人目佐藤文樹、山川、山本清幸、今来、徳永、一人おいて毛利浄賢、右端中村周（本書に寄稿）、前から 3 列目（石段上か、列は位置の前後で判断した）、左端から平田、松村、城野節子、一人とんで三上正利、千代（ちしろ）、右から二番目大原（本書に寄稿、インタビュー）教員と職員の集合写真。前列は背広ネクタイ、その後ろ、2 列目からは開襟シャツの先生が目立つ。5 列目の一人は学生服のようにも見える。図書館正面だが、夏で雑草が多い。



裏面に「嬉野昭和 30 年代」とある。問田直幹氏が教養部長であったのは昭和 36 年 6 月から 40 年 8 月、松原顯氏は昭和 39 年 4 月助手、42 年助教。よって撮影は 39 年か 40 年。裏面別人メモに「大和田（数） 桧垣（日本史）中村治（東洋史）林哲（英）4 枚」とある。前列左に立っている人、多久和、座っている人は、左から順に秋吉（体育）、衣笠、松原（本書に寄稿）、宮川、山川（ドイツ語）、佐藤（仏、ベレー帽）、西尾（ハンチング帽・国史）、宮地、尾崎（地学助手）氏か、安東（ベレー帽・本書に寄稿）、金富、逢坂、阿武（あんの・本書に寄稿）、空井、後列左から 武藤（日本語・日本事情）、大和田（数学）、川口（経済学）、問田直幹教養部長、三井（英語）、中村治兵衛、林千別、後藤（英語）、一井（化学）、中原（体育）、藤本、河野（こうの）和正、奥田八二、一人をおいて次、竹田宏（別人の可能性もある）、河野（かわの重昭、物理）、桧垣、ひとりおいて平田、出村、大原（本書に寄稿、インタビュー）、林猪三、両角（本書に寄稿）、梶返（かじかえり）、原田（本書に寄稿、座談会）、中村正夫、大久保（図学、本書に遺稿）。人名比定は福留先生が、大原、村瀬、安東、松原、衣笠、原田、各先生に聴取。2 枚とも村瀬一郎先生提供

教養部時代の思い出 —— 学園紛争を中心に ——

名誉教授 大原長和

九州大学教養部に昭和二十七年から昭和五八年まで勤務した者として、六本松への思い出は尽きないが、なかでも「学園紛争—教養部封鎖—封鎖解除」と連なる事件は、私にとっても一生忘れられない大事件であった。

本館を始め主要建物は過激派学生集団に占拠され、講義も研究も事務も全てストップ、これからどうなるのか、全く予想もつかぬ事態に陥ってしまった。

このまま推移すればどうなるのか。既に東京大学では、安田講堂封鎖解除のあと、入学試験は中止となり、新入生はいってこないという状況にあった。私はこのままでは、九州大学は廃校になるおそれさえあると考えた。

文学部の中国問題専門の教授からは、中国では、数箇の大学が建物もろとも文字通り消滅した、と聞かされた。

教養部消滅を防ぐため、何とかしなくてはならぬと決心し、岩崎、岡田、佐々木の歴代部長を輔け、上田評議員と共に、教養部教授会の意思結集、大学評議会の了承の取付け、警察当局との連携等、寝る間も惜しんで骨身を削って努力を重ねた。

遂には、上田評議員と共に学生会館で過激派の捕虜となり、血圧が急上昇してドクターストップ、九大病院に入院するハメとなり、封鎖解除は、病院のベッドで谷口学長代理等とテレビ観戦するの止むなきに至った。

封鎖解除後の教養部の惨状は言語に絶するものがあり、特に私の

隣の奥田学生部長の研究室は無惨極まるものであった。

このように、学園紛争の頃の教養部の思い出は、辛く悲しいものであったが、この時期を除けば、六本松は楽しい職場であった。

毎年、新一年生が希望に胸躍らせて、さあこれから大学生だ、将来の目標に向かって頑張るぞ、とハリキッテ講義に出てくる気迫に、こちらも学生の期待にそえる講義をせねば、と決意を新たにしたものである。

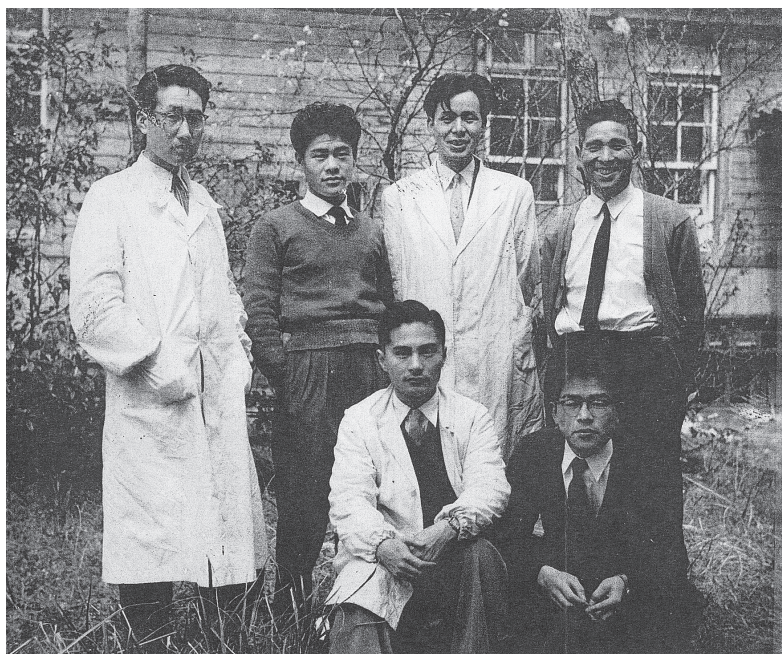
それは、いわば魂のぶつかりあう真剣勝負のはじまりのような空気を感じたのを、いまでも懐かしく思い出している。

六本松キャンパスの追憶

名誉教授 安東 毅

今の九大・六本松キャンパスの前身が、一九二二年創立の官立福岡高等学校「以下は 旧制福高」の跡地であったことを知る人も、今では少なくなつた。

その旧制福高へ一九四七年に入学した私たち（二六回生）は、六本松キャンパスで卒業する一九五〇年三月までの三年間を、旧制最後の高校生として過ごした。私は学業だけでなく、卓球部員として全国インターハイの九州・山口地区予選や伝統の対佐高戦に出たり、また市民が楽しみにしていた仮装行列などにも出るなど、夢多き学園生活を満喫していた。



一、二分校合併時の化学教室の助手、教務員と教室職員
上4名は右から東内教室員、赤司教務員、進藤教室員、安東助手、
下2名は小谷教室員、高橋助手

しかし、私が三年生になった一九四九年四月に、旧制福高は戦後の学制改変により新制(四年制)の九州大学へ併合されて「九州大学・福岡高等学校」となり、その敷地も九大第一分校の用地、つまり制度的には九大の「六本松地区」となった。なお、一九四八年入学の旧福高生は、学制改変により僅か一年の高校生生活だけで三月には六本松から去っていたし、新九大の入学式は、九月に行われている。そんなわけで一九四九年の九月までの「九大六本松地区」は、私たち約二八〇名の旧福高生だけが勉強に励み、部活動もしていた。その後は、私たちと新一分校生とが教室や実験室などを共有する併

行授業が行われ、私たち旧制福高生は一九五〇年三月に卒業した。そして旧制福岡高校は廃校となり、六本松の地は実質的にも九大のキャンパスとなった。今にして思えば、私は歴史的な学制改変の真ただ中にいたのであった。

その後、私は九大理学部を卒業し一九五三年一〇月から懐かしの六本松キャンパスで、化学教室の助手として勤務することになった。当時の六本松キャンパスは正面に木造二階建ての本館、その西の旧講堂や東のいくつかの理系教室棟など、旧制福高の木造建物が緑豊かな校庭と共にまだ残っていた。

またその頃は、化学実験の指導をした学生や指導教官を受けもったクラスの学生たち、また化学部の部員などとよく話し合ったり、夏などは博多湾での海水浴や九重登山などにもしばしば一緒に行ったものだった。梅光園公団アパートの私の狭い住まいにも、一九五〇年代半ば頃のお正月には二〇人近い学生が遊びに来るなど、良き時代であった。

その頃の第一分校の学生諸君には、かつての旧制福高生のような気質があった気がする。そのような教師と学生や学生同士の人情味豊かな交わりが、稀薄になってきたのはいつ頃からであろうか。私は、六本松の地で学ぶ学生が次第に増え、木造校舎がコンクリートの建物へ変わり始めた一九六〇年頃からと思う。

と言うのも、私が一九五九年末に工学部へ一時転出した後、一九六四年に教員として再び六本松キャンパスへ戻って定年退官する一九九四年までの間、教鞭をとる傍ら学生たちと接する中でそのことを強く感じたからである。

私は、一般に教養教育と言われている一般教育の実をあげるには、多人数教育ではだめだと常々言い続けてきた。今日の環境問題や国際問題は次世代の若者がグローバルな価値観や世界観をもつことを求めており、一般教育の重要性が再び認識され始めている。従って、

一世紀にわたり高等教育の場であった六本松キャンパスが消え去ろうとしている今、その旧制福岡高時代からの歩みを今一度振り返えり、検証してみるのも、意義深いことではないだろうか。

最後に、考えてみると七八歳の私は、旧制高校生の三年間を含めて人生の大半の歳月を「九大・六本松地区」との関わりのなかで生きてきており、何かしら六本松キャンパスとの深い縁えんを感じるのである。

六本松生活三四年の思い出

名誉教授 小島恒久

私が九大教養部に赴任したのは、昭和三〇年（一九五五）四月でした。当時教養部は第一分校（福岡）と第二分校（久留米）に分かれており、私が赴任したのは第二分校でした。第二分校は筑後川の対岸、いま久留米高専のある所に建っていました。だが、久留米市内と大学を結ぶ橋が二八年の大水害で流されたままで橋がなく、久留米医大の所から渡し舟に乗って学校に通わねばなりませんでした。一艘きりの手漕ぎの渡し舟が河を往き来していました。その舟を待つて、よく河の土手に腰を下ろしていましたが、まわりには「菜の花の遙かに黄なり筑後川」（漱石）といった、のどかな田園風景がひろがり、時の流れもゆるりとした時代でした。

同年一〇月、両分校が統合し、今の六本松キャンパス一つになり

ました。当時はまだ旧制福岡高等学校時代の古い木造の校舎でした。大学前の道路も狭く、しかも学校の柵にそって溝が流れていました。その溝が大雨のたびにあふれ出し、道路は一面の濁流と化していました。だから、通学には長靴が不可欠でした。今の六本松の景観からは想像もつかないような未整備な環境でした。

学生数も赴任当初は一学年一〇〇〇人ほどにすぎず、文科系、理科系ほぼ同数でした。だが、その後、日本経済の高度成長とともに理科系、ことに工学部の学生数が年々増やされていきました。それにつれて教職員の数も増え、教室も研究室も増築されていきました。そして四一年には現在の本館が完成しました。しかし、その後もその本館前に旧制福岡の建物がしばらく残っており、新旧の建物が奇妙なコントラストを見せていました。

赴任いらい講義は経済史を担当しました。はじめは経済史概説的なものを講じましたが、後には日本の近現代経済史を主とするようになり、大学院でも講義を担当しました。じらい三四年、六本松キャンパスに籍をおき、その間にはいろんな事がありました。何といつても最も印象深いのは、あの学園紛争です。

四三年初め、米空母エンタープライズ号の佐世保寄港反対闘争で、九大教養部とくにその学生会館が三派系全学連の拠点となつていき、六本松キャンパスは西日本における大学紛争の中心となりました。そして、同年から翌四四年にかけて紛争は次第にエスカレートし、たび重なる大衆団交、学生の無期限スト、学生の妨害を避けたい事件が相ついでおこりました。本館四階にあった私の研究室も数カ月にわたつて封鎖されました。

この封鎖は結局、四四年一〇月機動隊の導入によって排除されましたが、われわれが見守るなかで展開されたあの劇的な攻防戦は今もはっきりと脳裡に残っています。その封鎖解除直後、私も催涙弾

臭のなお残る本館に入り、私の研究室に行きましたが、見るも無惨な荒らされ方で、研究室に置いていた書籍類はほとんど奪い去られていました。

封鎖が解除された後も、しばらくは紛争の余波がつづいたし、セクト間の陰惨な内ゲバも跡を絶ちませんでした。その内ゲバで、私が指導教官をしていたクラスの学生某が重傷を負い、長く入院したのも忘れがたい思い出です。その学生がその後どうなったか、今も消息はわかりません。

こうして吹きすさぶ学園紛争の嵐の中で、私どもは学生たちの糾弾の対象として、平時では考えられないようないろんな経験をさせられました。だが、これも今となつては得がたい体験であつたという気がします。

こうしたさまざまな思い出をつみ重ねながら、六本松で三四年を過ごし、平成元年（一九八九）春に定年を迎えました。研究室の荷物をまとめて学園を去つた日、構内の桜が満開でした。あれから二〇年、六本松キャンパスに行くことはめつたにありませんが、たまに行くと、懐旧の念がわいてきます。そして今の学生諸君の姿を見ると、往時とくらべて今昔の感もいたします。この懐かしい六本松キャンパスがなくなると思うと寂しいかぎりです。何らかの形で記念の物を六本松に残して欲しいと思います。

六本松キャンパスへの追想

名誉教授 徳本正彦

そこは、緑にかこまれた静かな学園といったイメージには遠い、いささか殺風景なたたずまいだったが、同時にそこは、若者たちの熱気がこもり、時としてそれが立ちのぼっていく場所だった。六本松キャンパスには、私の青春時代と壮年期の、懊悩と哀歎の数々が込められている。

私ははじめてこのキャンパスに足を踏み入れたのは、一九四九年（昭和二四）年の九月のことである。道路はまだ舗装もされておらず、木造の校舎は狭くて、運動場には一面にペンペン草がはびこっていた。学生寮とその寮生もまた、時代の波をものにかぶって困窮のただ中であつた。

だが、自由を謳歌する学生たちの意気だけは軒昂で、高歌放吟にとどまらず、激論を重ねて学生運動もまた日常化していった。キャンパスは、勉強にいそむ場というよりは、欠乏の青春の憤怒を焚くところだったと言つても過言ではなかつたのだ。

ところが私は、そこを出てから六年後に、はからずも今度は教員として舞い戻り、以後二五年の間をそこで過ごすこととなった。この間の様々な出来事を短文で説明することはとてもできないが、穏やかな日々よりも、慌ただしく落ち着けない日々の方が多かったということは言えるだろう。時代が進み、道路や校舎も変貌をとげましたが、若者たちの欲求不満はつきることはなく、教員たるものは、その狭間に立つて苦しい思いを余儀なくされたのである。

学生たちの気質の変化にとまどいを覚えはじめたのは、七〇年代に入ってからのことだっただろうか。対話を拒否する学生たちが現

来し方 行く末

元教授（物理学） 後藤賢一

われはじめてから、学園紛争に突入するまでは速かった。そして、叫ぶ者とうろたえる者、反抗する者と傍観する者、その落差が大きくなっていくほどに、言論もまたその力を失いはじめたのである。確かに、学園紛争はキャンパス内の矛盾をさらけださせはしたが、他方では人々の心を荒涼たるものにしていったというほかはない。

学園紛争がようやく過ぎ去ったと思われる頃のことだった。音楽サークルの学生たちが、自分たちが出す音は騒音ではないと主張してゆずれないのには閉口した。「新人類」という言葉が聞こえるようになったのは、それから間もなくのことである。

ふり返れば、私が教養部を去ってから早くも二五年が経過しているが、私の中の六本松キャンパスのイメージは、いまだに安定しないうままである。しかし最近はこのキャンパスでの教員相互や学生たちとの温かかった交流の想い出がよみがえってくることも多くなってきた。加えて、見知らぬ人から、その昔先生に習ったんですよと声をかけられて、嬉しくなることも少なくない。おそらく、時の経過がそうさせるのだろう。

かつて六〇年も前に、六本松で青春の火を燃やした者たちの何人かは、今でも月に一度はその地に集まって昔を懐かしんでいる。だが、キャンパスを覗いてみようという者は、もはやほとんどいなくなった。そして時折口にするのだ。近頃は、学生たちも教員も、覇気をなくしてきているのではないのか、と。

私は、教養部に赴任したとき、大学で一般教育なるものが実施されなかったこと、またそれが日本の侵略戦争に由来することを知らなかった。私は少し首を傾げたものの、一般教育の趣旨は大賛成なので、一つ体当たりでやってみようと思った。そして学生の賛同に励まされて、講義内容を工夫したり、授業科目の思い切った改定案を提案したりした。また地球の有限性などの問題が出てきたときは、一般教育の目的を「人類社会の向かうべき方向を誤らないために」と勝手に掂けて考えた。

しかし、八〇年代後半あたりから、一般教育への風当たりが険しくなりだし、九一年に大学設置規程が改定されると、各大学は競うようにして一般教育を放棄し、アツという間に体制（社会・時流）に従属（埋没・迎合）する戦前の体制に戻った。私は、この変化の主な原因は、体制側の経済成長の持続への不安であったと思う。話がそれるが、私は定年近くになって、「合理性の追求は不合理を生む」という着想を得た。これは拠っていた科学主義だけでなく、多くの見方を再考するのにとっても役立つ。

ところで、大学教員による一般教育の放棄は私には敗戦のショックに匹敵するもので、ともに苦勞しようとした仲間から背負い投げを食らった思いがした。そしてその体験の結果として、人類社会の行く末に悲観的になってしまった。敗戦にやっつけりをつけて、前向きになって教職の人生を送っていたのに、終わり近くになって仲間を失い、未来への見通しが一八〇度反転した。

しかし私は悲観的になっても塞ぎこみはしなかった。悲観的にな

思い出の六本松

名誉教授 佐久間章

るにつれて見えだす光景は、もちろん良い眺めではなく悲惨なものであったが、予想外に興味深かった。それは人類という生物種が自己毀損を起こすほどに進化し、途方に暮れる様相であった。絶滅ではないが、限らない混乱と衰退に苦しむ人類が予見された。私はよく習慣的に、ではどうしたらよいかと自問しては、これが緩和ケア患者を前にした医師の心境かと自答している。いまにして思えば、私が人類社会の向かう方向を心配したとき、合理性を追求して進行した不合理はすでに手遅れだったように思う。

けれども、時代に危機感をもつ大学教員の中には、いまでも公共・総合・学際とかを謳って、理性の府である大学の責務を担いたいと考えてる人もいる。私見では、それは理性の副作用も理性の力で対処できるとする理性主義、いわば理性依存症である。私は、人類は自己治癒力を失っており、理性の力で人類が覚醒することはないと思う。しかし、あえて言及すれば、文字の発明や教育の発達などが本当に人間を幸福にしたか、つまり、それらは不幸の元でもあったことを含めた精察が必要と思う。少し説明すれば、例えばアメリカ先住民のイロコイ族は無文字で、闘争に明け暮れていたが、その後、どうして見事な調和社会が実現できたのか。また教育と言えば読み書き算盤の効用をすぐに連想するが、教育の何よりも着目すべき機能は、進歩や楽観や愛国のような固定観念（幻想・徳目）の付与にあるのではないか。その辺りからの問題と私は思う。

さて私は、大戦の経験を別にしても、自分で一般教育の目的を膨らませ、仲間から背負い投げを食らい、孤立して悲観的になったが、人類の未来の異様さに驚いたり感心したり、あるいは「合理性の追求は不合理を生む」と言う着想を得たりと、なんと貴重な体験を重ねたことかと思う。いま私は、独りで、自己納得した境地の人生を楽しんでる。

六本松！それは私の生涯の大部分を占める懐かしい思い出の場所だ。かつてそこには国立の福岡高等学校（旧制）があった。旧制福岡は戦後の学制改革で新制九州大学の第一分校となり、さらに旧制久留米工専の第二分校を統合して九州大学教養部となった。私が九大を退官した後に教養部は廃止され、現在は九大六本松地区という名称になっているようだ。六本松地区の伊都キャンパス移転に伴って「六本松の九大」は完全に消滅するわけだが、長年六本松に慣れ親しんできた私にとっては、まことに寂しい思いがする。

六本松よ、さようなら！

旧制福岡が誕生したのは大正十一年、それは私が生まれた年でもある。昭和十一年三月、私は旧制福岡の入学試験を受けた。そのとき正門左手堀際の桜が満開で、その美しさは今でも髣髴と目に浮かんでくる。それから一年間は六本松校内での寮生活、その後の二年間は毎日家から歩いて六本松の福岡に通った。

私が九大教養部に配置換えとなったのが昭和三十八年一〇月、それから教養部を停年退官した六一年三月までの二年六ヶ月間、私は六本松と共に暮らしてきた。その間に起こった多くの出来事の中で、私の心に深く刻み込まれている重大な事件といえば、それは一時期教養部を廃墟と化したあの学園紛争だ。

昭和四十三年一月、アメリカ空母「エンタープライズ」の佐世保入港阻止を叫ぶ三派系全学連の学生集団が教養部に押しかけてきた。この集団は殆ど九大以外の学生たちだったので、大学当局は正門を

閉ざして彼らの入構を阻止した。ところが門前に集結した集団は、外側から門扉を力任せに押し始め、門がしななびて今にも押し破られそうな状況になった。不測の事態を憂慮した当時の池田教養部長が「門を開け！」と指示したので、学生集団はなだれを打って学内に乱入した。彼らはその晩学生会館に宿泊し、翌日佐世保に向けて行ったが、数日間は居座ったようだった。

昭和四四年三月入試の日の朝、「中核派」と称する集団が教養部本館を突然封鎖し、入試が実施できなくなった。大学側は急遽受験予備校の英数学館を借りて受験生を数台のバスで運び、そこで試験を行うことができ事なきを得たが、何ともひどい出来事だった。

五月に入ると学生たちは「大学法反対」を叫んで無期限ストに入し、授業がほとんどできなくなった。さらに六月末には過激派学生たちが教養部本館を占拠し、バリケードを築いて封鎖するに至った。そのため事務室は学外に避難し、教授会も学外で開かざるを得ない状況になった。封鎖をいかにして解除するかについて、教授会でも散々議論が戦わされたが、なかなか結論に達し得なかった。柔軌路線で対応していた大学当局の態度に業を煮やした当時の奥田学生部長は、封鎖中の学生らを排除するために反対意見を押し立てて入江学長の許可を取り、同年一〇月一四日に県警機動隊の出動を要請した。

機動隊が教養部に到着するや、本館に立て籠もっていた学生らは、屋上から次々に火炎瓶を投げつけ、警官隊は一斉にホースで水を勢いよく噴きかけるなどして前代未聞の壮絶な攻防戦が展開された。近隣に住む人たちは、さぞ驚きの目を見張ったことだろう。

最後には警官隊が突入し、首謀者たちを逮捕して引き上げたが、その後の教養部本館内は見るも無残な惨状だった。教官室はすべて滅茶苦茶に破壊されて図書や書類が床に散乱しており、部屋を仕切るベニヤ板の壁も打ち破られていた。これが大学教育を受けた学生

たちの仕業かと思うと、腹立たしいやら情けないやら涙が出た。

奥田教授が教養部長だった昭和五二年一月には、傷みの激しい学生会館の改修工事をするために、機動隊を導入して占拠中の「反帝学評」の学生らを排除した。その結果、学生会館は一般学生が自由に使えるようになり、ようやく正常な状態に復したのである。

以上のように、昭和四〇年代から五〇年代初期にかけて私たちは、まことに苦痛に満ちた悪戦苦闘の毎日だったが、私の六本松での生涯忘れることのできない思い出として、ここに述べさせていただきます。次第である。

六本松の思い出

名誉教授 原田 溥

学部生の二年、大学院生の五年、助手の一年の計八年を除いて九大生活四五年のうち、三七年を六本松地区で過ごしたことになる。教養部への入学、新米教師としての赴任、大学紛争、教養部改編の仕事に明け暮れた日々、思い出はつきない。その中で教養部学生として過ごした日々、および教師生活の最後に関わった教養部改編のあれこれについて記すことにする。前者はやや記憶はあやふやだが当時の六本松の様々な風景と重なっているし、後者は個人的感懐も含めて、記録に残しておきたい気がする。

1 教養部生としての六本松の断片的回想

昭和二六年に九大に入学した。当時私が入ったのは旧制福岡高校の跡の第一分校である。建物にも、先生方にも学生にも、まだ旧制高校の名残りがあつた。建物は木造だったし、よれよれの学生服に五高や七高のボタンをつけた学生が闊歩していた。先生の講義をいわゆる付けペンでノートする講義も珍しくなかったが、ある時隣に

座っている旧制出身と思われる学生が、私の机の上のインク壺に悠然とペンを突っ込み、平然とノートをとりだしたのには驚いた。これが旧制高校の風習なのかと思つた。出身高校の先輩による亭々舎での手荒な新入生歓迎コンパもまた、ブリキ缶を太鼓がわりにたたいて寮歌を歌い、その後運動場の真ん中に枕木を積み上げ、ファイアーストーム。学而寮からの野次をきっかけに上級生を先頭に寮にだれだれ込んだが、二階から雑巾バケツの水を浴びせられ、ずぶ濡れになり、ストームが終わつた時、私の高下駄の歯が抜け落ちていた。全てが旧制の名残りのように思えた。頻繁に学生大会や、集会が開かれたように思うが、帰ろうとする一年生の前に傲然と立ちほだかつた或る年嵩の学生が、「ゲーテ曰く、最初に行いありき」とつぶやくのを聞いた。政治年表を繰るまでもなく、当時はまさに政治の季節だった。この記念誌『さようなら九大六本松』に寄せられた中村禎里氏原稿によつて、私が当時参加した学生大会が単独講和反対の学生大会であつたことが分かり、当時の記憶がまざまざと甦つた。中村氏が記されているように、学生大会の場所が次々に変更され、私たちは最終的に運動場から急遽、寮の食堂に移動した。入り口には机でバリケードが築かれたが、大会でストライキが可決された直後に警官隊によつて、轟音とともにバリケードが崩され、政治的に未熟だった私は、混乱の中、ただもみくちやになって、会

場の外に押し出されたのを憶えている。この時無差別に学生が逮捕されたが、その後まだ興奮冷めやらぬまま、午後の外国語の授業の際、逮捕された学生の一部が次々に教室に戻ってきたのを記憶している。ヴェルコールの『海の沈黙』、星への歩み』やルイ・アラゴンの詩、またフランス抵抗文学が読まれていたのは、当時の社会状況の反映だったからだろうか。

サークル活動は盛んで、社会科学系の研究会も多かったが、なぜかよく分らないが、私は哲学研究会の会員にさせられた。勧誘したのは阿部真也氏（後福岡大学教授）である。カントの『純粹理性批判』がテキストだった。今でも当時使つた岩波文庫の『純粹理性批判』が手元にあり、開くと傍線や書き込みが沢山あつて本当に懐かしい。内容は難解でどのように研究会をやつたかよく憶えていないが、ただ哲学の講義に当時山本先生という方がカントの自由論を講義されていて、ある時カントの自由の意味が分かつたと思える瞬間があつて嬉しかったのを憶えている。この研究会の上級生に博識の人がおり、日本資本主義論争（封建論争）の存在を知り論争史に夢中になつた。

断片的に思い出すが、たしか二年の夏休みの夕方、先生方の全くボランティアの無料奉仕で、英、独、仏の外国語授業があつた。私が出たのは石中象治先生のカロツサの『ドクトル・ビュルゲルの運命』の講読だったが、ずっと後に在外研究でミュンヘンに滞在した時、私が住んだアマリエン通りの端のガソリンスタンドの壁のレリーフに『医者にして詩人、ハンス・カロツサが一九一四年から一九二九年までここに住み仕事をした』とあるのを見つけ教養部時代を思い出した。

その当時経済学の講義は満鉄調査部から引き揚げてこられた岡崎次郎先生だった。いがぐり頭で入道のような先生は、いつもノートと本を風呂敷に包んで教室に悠然とあらわれ、つまらなそうに講義

をされた。きつと子供のような我々を相手に講義されるのはつまらなかつたに違いない。ある時、前間良爾君（後佐賀大学教授）や福岡道生君（後、日経連専務理事）や早逝した桐井君などと一緒に岡崎先生のお宅に伺い、アダムスミス『国富論』の講読をおそろおそろお願いしたことがある。意外にも先生は快諾され、お宅は教養部の前、今の福岡銀行の裏手、マンションが建ち並ぶあたりではなかつたかと思うが、毎週一回講読会が行われた。今考えても沢山の翻訳のお仕事を抱えて多忙を極めておられた先生にとつては、随分迷惑なことではなかつたかと冷や汗が出る思いである。

この時の仲間が語らつて、同人雑誌（ガリ版）を出すことになった。雑誌名をどうするか、いろいろ議論したすえ、「えるんて」とした。収穫を意味するドイツ語で大学入学直後の気負いや銜いもうかがえるが、懐かしい雑誌である。創刊号の巻頭論説を岡崎先生にお願いしたら、「マルクスとエンゲルス」という名文を寄せていただいた。その際毒舌家の先生はにっこり微笑まれて「世に三号雑誌というのがあるよ」と言われた。しかし先生の予測は外れて四号まで出た。その二号に大分県山国川の人柱伝説調査記が載っている。二年の夏休みに桐井君の母方の郷里である中津に皆で出かけ、耶馬溪に遊び山国川にまつわる伝説を調べたものだ。中津市内の古いお寺を訪ね住職の話の聞いたり、郷土史家から教えを受けたりした。かなり柳田國男に依拠していると思うが、最終的に前間君が執筆した。出版年次を見たら、昭和二八年になつていたので、もう三年生になつていたのかも知れない。その号には松尾和彦君（後西鉄グラランドホテル社長）の「立原道造の世界」や相良憲一君（後京大教授）の「トーマスマン覚書」などもある。

この頃学生の間にいわれる「帰省運動」というものがあつた。一種の学生運動である。桐井君や松尾君の修猷館高校時代の東大に行つた友人達が組織したもので、夏休みに東京の学者を福岡に呼び

講演会を行った。その時の組織者である学生達の名前を忘れてしまつたが、いま日本中世史学者になつている大隅和雄氏の名前だけは鮮明に覚えている。この「帰省運動」によって国文学者の西郷信綱、哲学者の三枝博音、政治学者の岡倉古志郎といった人たちがやつてきた。西新町の公民館みたいなところが会場だつたような気がするが、いまやすべて忘却の彼方である。

2 教養部組織改編についての個人的回想

昭和六三年（一九八八年）秋、教養部長に選出された時、私の任務はただ一つ、教養部の組織改編に収斂され、以降四年間明けても暮れてもこの問題に終始した。一緒に仕事をした多くの先輩、同僚、友人達の顔が懐かしく思い浮かぶ。

組織改編終了後、年月が経ち資料の散逸、人々の記憶も薄れつたあつた時、この改編を共にした国立七大学の教養（学）部長会議のメンバーで『大学改革の到達点にたつて―国立七大学教養（学）部の総括―』という記録文書を纏めた。この記録文書によりつつ、私の個人的記憶も結びつけて当時の組織改編のことを記しておきたい。

九大教養部にとつても改革構想の長い歴史があり、私たちの先輩による組織改編と全学共通教育の改革をめぐる様々な試みがなされたことは、この文書に明らかである。その結果として昭和五三年に健康科学センター、昭和六三年に言語文化部が設置された。したがつて、組織改編の中心問題は、人文、社会、自然の三分野の教官から成る学部構想に絞られていた。「九州大学教養部将来構想について―教養学部設立案―」の大綱が昭和六三年に全学的に承認された後、教養部改組委員会と教養学部構想検討専門委員会は、共同で全学でさらに検討を深めるための資料「九州大学における教養課程

教育の改革と教養学部設立について」をまとめた。その時の理念を要約すれば、一般教育の改革と学部設立構想は相即不離の關係にあること、一般教育の改革は人文、社会、自然の三分野を横断する学際的・広領域的性格を基盤としたコア・カリキュラムであること、教養学部は文系・理系を包摂・統合するパイ型 (patella) の教育研究を行い、「ニューゼネラリスト」の養成をめざすことであった。この構想は平成二年度および三年度にはじめて概算要求にのせられた。概算要求に乗せることは、私たちの先輩からの長年の希望であったから、「とても嬉しかった」と私は当時の日記に記している。しかし、諸般の情勢により、高橋良平学長の提案もあり、学部構想は軌道修正して、平成四年度の概算要求は「環境地域学部」および「基礎科学研究教育部」の設立という形で行われた。

教養部長時代私は日記をつけていたが、それを見てみると、この間状況は色々錯綜していたことがわかる。平成元年（一九八九年）の一〇月に当時、文部省高等教育局大学課課長補佐だった徳永氏にお会いした時、学部構想の前に大学院をつくったかどうかと示唆された。東北大の浅尾、京大の新田、阪大の越田といった教養部長とよく電話で連絡をとりあい、情報の交換をしていたが、どこも改組は手詰まりでどうも文部省は大学院設置が先行の方向ではないかという状況だった。

時期がどのように重なっていたか定かでないが、九大本部の主計課長と話し合っている時、「教養学部構想もいいたけれど、総合情報学部をつくったらどうですか」という話がでてきたことがある。彼によると情報系は足りない、文系情報、理系情報、法学、経済、文学、工学、理学、全部包括した総合情報学部だったら可能性はあるという話だった。私の頭の中にはずっとそのことが残っていたが、長い教養学部構想の検討の経緯もあり、軌道修正する余裕はなかった。その後、元九大学長で大学審議会委員の田中健蔵先生とお会い

した時も、また文部省の合田大学課課長補佐も大学院先行の話だったので、この方向は動かないと思った。しかし大学院先行の態勢はすぐには整わなかったため、先に述べた「環境地域学部」構想を一種の緊急避難的構想として概算要求をした経緯がある。

こうして独立研究科としての「比較社会文化研究科」構想にたどり着いた。結局教養部改組の基本的枠組みは、人文・社会系と自然科学系の一部で「比較社会文化研究科」を構成し、自然科学系は基本的に既設研究科への分散配置、それから数理学研究科の創設であった。教養部廃止後の教養教育運営組織としては「全学共通教育機構」の設置を決めた。

いろいろ思い出すが、「比較社会文化研究科」の設置についても反対意見があり簡単ではなかった。毎日夜遅くまで議論を重ねたが、この時の改組委員の人たちおよび庶務、人事経理を中心とした事務官の人たちには、本当に感謝の念で一杯である。福留君（現名誉教授）や松原君（現名誉教授）とは我が家で遅くまで相談したことを思い出す。自然科学系教官の既設研究科への分散配置についても、非常に困難があった。教員配置をめぐる工学部と理学部との対立は激しかったが、工学部との交渉が成功したのは当時工学部長だった国武豊喜氏の行政的力量も勿論だが、そのおおらかな人柄にもあったことをここに記しておきたい。また当時の学長和田光史先生に教養部を全面的に支援していただいたことも忘れ難い。

比較社会文化研究科の文部省ヒヤリングに行ったのは、平成四年（一九九二年）四月と六月だが、二日間のヒヤリングの初日、松原君とふたり、共通教育の改革について当時の課長補佐久保氏に説明した。一般教育の改革のなかみについては、良いということになったが、「全学共通教育機構」という名称が議論になった。もともとこの名称が一番最初に概算要求をする時、当時の本部の玉垣経理部長が「先生、要求は壮大な名称で行きましょう」ということで決まっ

た名前である。ただ名前だけでなくこの機構は研究部と教育部をもち、かつ共通教育だけでなく、自己点検も学外開放教育もやる非常に大きな構想だった。結局名称は変更され、押川教養部長の時、「大学教育研究センター」となった。翌二日目、比較社会文化研究科の説明は、設置準備委員長の松永雄二教授（文学部）が全体構想を、有馬学教授（文学部）と福留久大教授（教養部）が人文科学と社会科学の関連で比較社会文化研究科の内容について、野口健司教授（言語文化部）が外国語関連について、そして私が全学共通教育について大学院担当の専門官に説明した。この後帰途たしか新橋でビールを飲みながら交渉の成果について話し合った記憶がある。メンバーの評価は様々だったが、私は確かな手ごたえを感じていた。教養部長の任期は平成四年までであったが、その後の人たちの努力で平成六年三月、比較社会文化研究科が設置され、教養部はそれが官制化されてから約三〇年の歴史を閉じた。

六本松キャンパスよ、お疲れさま

名誉教授 松原 顯

私が入学したのは久留米の第二分校でしたが、半年後の分校統合に伴い、残りの一年半の教養課程を、このキャンパスで過ごしました。数年後、教養部の教官として、再びこのキャンパスの住人となり、その後は定年退官までの三十数年間をここで過ごしました。今

は消滅してしまった教養部は、云うまでもなく本学の一般教育を担う組織でした。学生時代の一般教育といえば、大教室におけるマスプロ授業というのが相場でしたから、私も一般教育をその程度のものとして認識しておりました。立場が変わって教官になってみますと、実は一般教育の活性化のためのさまざまな努力が払われていることを知りました。そのような努力にもかかわらず、私にとつて一般教育は、定年にいたる最後の日までしつくりこない存在でした。戦後の学制改革のモデルとされた欧米のリベラルアーツは、遡れば古代ギリシャの学園にいたる、二千数百年の伝統の中で培われたものです。対して我が国の一般教育は、高々六〇年余りの歴史しかないので、すから、しつくりこないのも当然かもしれません。現在の努力の積み重ねが、やがてわが国の社会や文化に根を下ろした教養教育へと実つてくれることを心から願っております。

さて、教官としての平穏な初めの数年間は終わりを告げ、このキャンパスも、全国に波及した大学紛争の嵐を免れることはできませんでした。日常の時間が流れている外側の世界をよそに、フェンスの内側では続発する異常な出来事に翻弄されました。大学紛争にまつわる話を所定の字数で述べるのは無理ですから、その話は割愛させていただきます。ただ、少し脱線させていただければ、十数年前、たまたま店頭で元東大共闘議長の山本義隆氏が書かれた科学史関連の著作に出会い、それ以来、この方の一連の著作にハマっております。この方の著作からは、昔の出来事が語られているにもかかわらず、現代科学の最先端への目配りが感じられるのです。

本題に戻りましょう。六本松は、南公園の丘陵地帯と大濠公園の池に挟まれたせまい平地にあります。山の上ホテルのあたりから見下しますと、天神からの交通が一度六本松に集中し、そこから再び西部の住宅街へと広がってゆく様が見取れます。我々のキャンパスは、その六本松のかなりの上とまった面積を占めているのですか

ら、この後も姿を変えながら重要な役割を演じてゆくことでしよう。しかし、この時点でひとまず、このキャンパスにかかわった方々、さらにはいろいろと迷惑をおかけした周辺住民の方々をも含めて「六本松キャンパスよ、本当にお疲れ様でした」と云いたいのであります。

夢 茫 々

名誉教授 猪城博之

昭和四三年から六〇年まで、一七年間も六本松の教養部にお世話になっていたので、思い出すことも少くはないのだけれども、いざ書こうとすると、まとまらなくて茫然とする。

それで先ず赴任した最初のころの印象を書くと、それまで市内の私立大学で、入学から卒業までの四年間の学生を見続けて来た者としては、一年半から二年という一般教育課程の期間は短かく、何か新入生にだけいつも接しているような感じがしないでもなかった。そして三、四年次生や大学院生などのいない校庭は、大学としては何か物足りなく、柳田国男の比喻を使えば、こちら岸から向う岸へと、川渡りの人々を次から次へと渡すだけの船頭みたいな者と、おのれを自覚しないわけにはいかなかった。

しかし、そのことは反面、研究者としてはおのれの関心にのみ従って、我がまま自由に研究を続けることを許されることでもあって、

この点、わたしは幸せであったと言わねばならない。もう三〇年近くも以前に、この六本松の旧制福岡高等学校の生徒であったころに抱いた、幼稚な少年時の問題意識を、こんどは黒板を後ろにして、そのころの自分とあまり年齢の違わない学生たちに語りかけることができたからである。進歩がないと言われたら、たしかにあまり進歩はなかったかも知れないが、問題そのものにいくらか熟することはあったかも知れない。

それは良き師、良き友に恵まれたということであって、この友の中にはおのれよりも年若い者もあり、しかも教養部の同僚としての友もある。これら師友の助けがあつて、六本松を辞するにあつての、おのれの退官記念号に、一文を草することができた。それは西洋のギリシヤ哲学とキリスト教に関するものであつたが、自分自身にとつては、日本と東洋における儒学と国学との関係にもつながるものであつて、これも教養部における一七年間の自由な学びのおかげと言わねばならない。そしてその結果は新たな出発でもあつて、今もその学びと探求は続いているのである。祝されたり、我が六本松の一七年間と、自画自讃して感謝の筆を擱く次第である。

独逸語科教室が輝き始めた頃

元九大教養部助教授・福岡大学名誉教授 両角正司

昭和三十七年、九州大学教養部の採用は決まったが、箱根から先には親戚、友人、知人誰一人いなかった私は、福岡の街や教養部について何も知らないのに半端な知識は却って新鮮な印象の妨げと強がり、不安を押し隠して一切調べもせず怠惰に終始してしまった。従って頼みの綱は独仏研究事務室で一面識もない私を待っていて下さる毛利浄賢先生しかなかった。到着した板付から電話を掛け、指示を仰ぎ、呉服町から西鉄市内電車に乗って、福岡市大坪町の分校統合間もない九州大学教養部に何とか辿り着いたが、先を思っても、微かな光明すら無く、暗澹たる気持ちに変わりはなかった。毛利先生と独仏研究室職員の野田ハルさんのお二人が予め借りにすることになっていた当時の市立西新病院裏手の、ある閑静な屋敷の一部屋に連れて行って下さった。この部屋には、私の後に土屋明人氏が入居することになる。「毛利先生の手紙に「若くて、美しい」と書かれていた」家主の姉妹に挨拶を済ませた後、野田さんに同行をお願いして、西新商店街で布団や枕を買い込んだ。これで何はともあれ、その夜休む部屋は確保できたことになる。身の回りの品も最小限買って、商店街の一隅でようやく夕食を口にしたが、大きな空虚がぼつかりと胸の内に居据わっているようで、何を食べているのかさっぱり判らぬ心境であった。

翌日から挨拶回りや諸々の手続きやらの大変忙しい事態が待ち受けていたが、何はさておき、当時の教養部長間田直幹先生の部屋へご挨拶に赴いた。問田先生はまだ若く、長身痩軀、鶴のような印象を受けた。明朗闊達に対応して戴き、今でも感謝している。建物は

旧制福岡高等学校の古ぼけた木造のまま、教授会も本館の一階右手で行われ、廊下には数箇所大きな穴が空いていたと記憶している。しかし建物自体は頑丈な造りであったので、後に某先生の、少々不謹慎な、陰の発言「こうなったら、シロアリでも飼いますか」も全面的に共感できた。個人研究室は慢性不足状態で、新館二階の独仏研究室隣にあった、当時最若年の伊藤利男氏の部屋に入れてもらった。この部屋の扉も一度蹴っ飛ばさないと、閉まらない代物であった。

ドイツ語の同僚は、長老の石中象治、石本岩根両先生は別格として、森永 隆、山川丈平、千代正一郎、林 猪三、毛利浄賢、中村 正、宮川 政の諸大人は皆故人になられてしまった！―勉強酒、「女性に関して少々」、いずれの面でも一筋縄では行かぬつものたちであった。厳しく且つ優しいこの先輩たちから、酒を飲む作法やら研究室の使い方、果ては生活一般に亘って（長老から赴任一年間は結婚しないように、の一言さえあった）野放図に育った私は、手荒い薫陶を受けた。指導の場は天神、中洲、ある時は作家、文学者の立ち寄る黒門であった。一方教室を代表とする紳士と言え、日頃笑顔を絶やさないが、限度を超すと癩癩を爆発させる、時には恐ろしい石中先生と清廉、実直、酒は一滴も口にされない、白髪、温厚な石本先生のお二方であった。

私と一緒に着任した九州工業大学からの大谷恒彦氏、東大大学院からの紅一点、柏木素子さんの二人がどのような指導を受けたかは、定かではない。その柏木さんも既に亡くなり、伊藤、大谷の両氏のほか、残るは、空井義観氏、田代崇人氏、そして私のみとなつてしまった。

今思い返すと、その頃の教養部独逸語教室は、強く自己主張する人も、傍らに立ち、微笑をもって見守る人も、多士済々、活気に溢れていたが、誰もが大らかであった。そして学生たちも澆測として

いた。この完結した回想の世界を、トーマス・マンの短編に倣って、「六本松は輝いていた」と表現したら、少々感傷に彩られた言い過ぎと謗られるであろうか。その後教室も徐々に、そして大学紛争を境に急速に、変貌していった。だが、私の回想の六本松は何時になっても色褪せることはない。

九大教養部の思い出

藤崎倭文字（二〇〇一年三月退職）

私が九大六本松キャンパスにお世話になったのは、昭和三七（一九六二）年七月から事務職員として他部局に異動するまでの二二年間でした。まだ管理棟の本館が木造で、比翼造りというのでしょうか左右の袖の部分は長い廊下が伸びていて、二階に教室もありました。その他にもまだ木造の校舎が沢山あって、校舎と校舎の間の草むらから蛇などが「こんにちは」と顔を出してびっくりすることもあり、まだ自然がいっぱい残っていました。その内本館も六階建ての現在の建物になり、忙しい中にも近代化の波に乗ったという嬉しい思いで引越しをした記憶があります。

六本松キャンパス（当時は教養部）では、教官・事務職員の別なく教職員が何をするにも一緒になって活動していたように思います。労働組合には殆どの人が入っていましたし、当時は働く女性の一番の要求でもあった保育所運動では、いろんな立場の専門の先生

方に教えてもらって、保育所の実現にこぎつけたのもそのお蔭だと思えます。親和会レクレーションなどいろんな行事も先生方と親しくお付き合いさせていただきました。秋には、余技展と称して絵画や写真、生け花など教職員の作品が会議室を借りた会場に展示され、余暇に描かれた油絵など先生方のまた違った一面を見せていただきました。一方スポーツではテニスが盛んで、九大には沢山ある教職員のテニスクラブの中でも団体として九州テニス協会など外の試合に出て、九大教養部クラブの名も通っていました。

殊に忘れられないのは、学生運動激しい頃の昭和四三（一九六八）年一月の原子力空母エンタープライズの佐世保入港時に反対運動の学生たちが佐世保から戻って来た折のことです。切迫した雰囲気の中、正門を開けて学生を受け入れた教養部長の裁断を支えて、教職員が一体となって対処したように思います。当時は学生運動がピークを迎えようとしていて、六本松地区がその大きな拠点でありましたし、三派全学連による本館封鎖などでその対処に全学から教職員が駆けつけて来られていました。学生による本館封鎖・占拠から逃れ、六本松キャンパス近くに事務部を移して、機動隊導入による封鎖解除になるまでの数年間は、職員として決して忘れることが出来ないものです。六本松キャンパスを語る時、学生運動を抜きには語れません。

奇しくも今年は、エンプラ闘争四〇年ということで、当時を思い出した人も多かったのではないのでしょうか。また同じ年の六月、箱崎の構内では建設中の大型計算機センターにファントムが墜落し、こちらも墜落四〇年ということで、当時の米軍板付基地撤去を求める学生運動やベトナム反戦を振り返り、平和憲法の意義を考えると、シンポジウムやフォーラムが開かれるということが報じられていました。

その後教養部も改革され、いろんな面で大きく変わりましたが、

私にとってこの教養部には言い尽くせない思い出が駆け巡ります。他部局にない和やかな雰囲気があったと、九大職員としてお世話になった三九年間の内でも六本松キャンパスでのことは一番印象に残っております。

六本松キャンパスもその長い歴史を閉じ、来年三月には伊都キャンパスに移転ということで、これも時代の趨勢でしょうか、九大のこれからの発展を祈って一筆書かせていただきました。

六本松の思い出

名誉教授 西村 久

昭和四一年四月物理担当の助教授として箱崎から六本松に赴任した。最初に、新一年生の歯学部医学部連合クラスの担任となった。物理の講義は医学部のもう一クラスと一緒にしておこなった。物理（あるいは力学演習）を受け持ったのは他にももう一こま物理学科、数学科の学生であった。そこには、若者が入学時に、また誰しもが新年を迎える年の始めにあたって持つような、新しい志を示す澄んだ目があった。担任クラスとはコンパなどでよく交わり、物理の学生とは同じ専門志向上よく接触した。彼等の教養部での生活には自由と進取の気風が感じられた。彼らは今で言う団塊の世代であるが、そんな名称などお構いなく、今思い出しても彼等は闊達で積極的であり、十分に個性的であった。このことは、物理の学生の場合学部

への進学時に「素粒子」という文集を作って行ったことなどによく表れている。このような学園の気風、教師にとつては教育と研究の場として学部よりむしろ自由に満ちた空気、を私は愛したのであるが、これも着任して束の間のことであった。四三年早々に起きた工プラ騒動に端を発する学園紛争は完全な収束をみるのに殆ど一年の歳月を要した。その間教養部は全くの不毛の地と化した。

四三年一月、米軍原子力空母エンタープライズ佐世保入港反対闘争の拠点として九大教養部を選んだ三派系全学連の学生が各地から結集しようとした。教養部教授会は彼等の入構を拒否して校門を閉鎖していた。教養部正門前に膨れ上がった学生群とそれを取り囲む警察機動隊との衝突はまさに一触即発の状況にあった。そのとき校門を開いて学生達を構内に入れたのが教養部長池田数好さんであった。玄関前に警戒に出ていた教授会のメンバーは誰しもほっとしたのではないかと思う。このとき誰が紛争の泥沼化を予見できたであろうか。大学の自治には警察機動隊は馴染まないものだった。後日、大学の自治は学生の暴力の前では無力となり、機動隊の助けを借りる羽目となったのだが。占拠封鎖された教養部に機動隊を導入して封鎖解除し、紛争の処理に当たった人が入江学長である。入江さんは「総長」の呼称をやめ、「学長」を採用した人である。二〇年後頃「総長」が復活して今日に至っている。もともと、総長または学長は、選挙で選ばれるので、大所帯の医学部、工学部、農学部出身者が多い。加えて、教養部の票がものを言う。池田さんは入江さんのように火中の栗を拾うこともなく、そのあと学長になった。教育学部出身の池田さんの場合教養部の票がものを言った例である。従来、次期総長（学長）の有力候補が教養部長になることが多かった。むしろ、教養部長をやって、もう一箔をつけて有力な総長候補になると言った方が当たっているかもしれない。私が着任した当時の教養部長は工学部出身の水野さんだった。水野さんは間もなく教養部

長を辞めて総長に選ばれた。教養部長を部内から選ばうという意見がもちろん教授会の一部にはあったが、箔が違うという意見（実際に聞いた発言）によって大勢は部外からとなった。そうして水野さんの次に池田さんがやってきた。こんな訳で、教養部においては部長を部内から出すことはなかった。しかし、紛争の埒塙と化した教養部をみては、池田さんがやめたあと部外どこにも部長になろうという人はいなかった。取り敢えず部長事務取扱が生まれ、結局部内から部長が選出されるようになった。これは狼藉と破壊の極みが尽くされたこの学園紛争の唯一の遺産といえるかもしれない。封鎖解除のあとの量的な後始末もさることながら、燻り続ける紛争の余燼に対処して迫られる質的な後始末に手を焼いた。長い全く不毛な期間であった。

教養部教職員テニスクラブが昭和一九年に当時三二・三歳の数学の大和田さんと化学の平田さんを中心にして創立されたと聞く。昭和四六、七年頃から団体戦の九州クラブ対抗、実業団対抗で優勝するなどなかなかの強豪クラブだったらしい。というのも私がクラブに入部したのは昭和五一年の夏からで、それまではクラブの存在はおろかテニスのテの字すら知らなかった。その後も上記の団体戦の優勝は一度や二度ではなかったと記憶している。事情は定かではないが、ともかくクラブに入部した。クラブ専用のクレイ・コート二面が地学教室の別棟とその南側の体育館、いずれも古い木造であったが、の間にあった。北から南に順々に、生物と地学の二号館、物理と数学の三号館、化学と物理実験の四号館となっていたが、四号館の南側に三、四本の桜の木を夾んで床板の剥がれそうになった地学の別棟があった。この建物にどんなわけで地学が入っていたのかは知らないが、テニスコートが丸見えのところであった。化学の上階の一部からもコートは見えた。そのせいか化学や地学にテニスのうまい人がいた。もちろん大和田・平田組をはじめとして体育系

の人などスポーツ的センスのある人たちがクラブの中心選手であった。私は入部して二、三年のうちになんとかテニスを楽しめるようになったが、五三年夏から二年間海外研修出張した。帰ってみると、当時のテニスブームを反映してか、若手の部員が急増し、私を抜いていた。記録によると、私は五七年春期新人戦でやっと優勝してB級に進めた。そのころちょうど前後して学生用コートがハードコートに改修され、体育館が取り壊されて課外活動施設が建設されることになり、クレイ・コートもつぶされた。教職員はハードコートの一、二面を使うことになったが、足腰に響くためか、次第に部員の足が遠のいていったように思える。それでも結構テニキチがいてよくやったものである。私は小雪の降るときも一人でサービスの練習をした。物理の技官の人を得意のスライスサーブで空振りさせるのが楽しかった。今でも私のテニスはサービス頼みである。大和田先生は定年退職後もよく元気な姿を見せられた。大和田・平田杯の折りには賞品まで用意された。先生の七〇歳前後の頃、定年近くになった小生の研究室に時々こられてテニスを誘われたが、「とうとう追い抜かれたかあ」の声が残っている。私も定年後一〇年間くらいはときどき教養部テニスクラブのお世話になった。テニスが六本松での私の生活の一部であったことは忘れられない。

六本松キャンパスの前身は旧制福岡高等学校である。戦後、占領軍の命令によって新制度の学制が施行され、六本松キャンパスは九州大学教養部として一、二年生の一般教養科目及び基礎科目の教育がおこなわれる場となったことは周知の通りである。爾来、旧制高校の教育の基調にあった全人格的教育は大学教養部での教育に引き継がれることになった。旧制高校に於いては、個性あふれる教授達に接することができ、彼等の蘊蓄を傾けた講義に事欠くことはなかった。このような形態と内容を持った教養部は反面その研究設備と研究費において学部大きく劣っていた。学内における教養部の

改革計画は幾度となく浮かんで消えていった夢であった。時勢というものか、私が定年退職する平成六年三月教養部は消滅した。ちなみに、この同じ年に旧制高校に在籍した経験を持つ大学教員は六五歳定年の大学を除いて国立大学からはいなくなつた。

九州大学キャンパスの移転統合も幾度か計画された夢であつた。嘗て箱崎キャンパスは米軍板付基地から発着する戦闘爆撃機のやりきれない騒音の直下にあつて、正常な研究教育の場と言うには程遠いものであつた。大学機構の拡大に伴つて生じたキャンパスの狭隘さの解消と上記のような劣悪な環境の改善、それから箱崎、馬出、六本松と分散したキャンパスの統合等の諸問題の解決は積年の宿願であつた。実はビッグ・チャンスがあつた。それは米軍春日原基地が返還されたときであつた。教養部では教授会のついでに春日原移転について諮られたが、「家から遠くなるから困る」などの他愛もない意見が出た。結局、全学的にも盛り上がりに欠けたものとなつた。基地跡地の一部に大学院総合理工学研究科の発足と応用力学研究所、生産科学研究所、健康科学センターなどの移転が実現し、キャンパスはさらに分散する結果となつた。今回、糸島半島元岡地区(伊都キャンパス)への移転が工学部から始まつたが、平成二一年度に六本松地区も伊都キャンパスに移転統合する。六本松キャンパスは大正一一年の旧制福岡高等学校の開設以来まもなく米寿を迎えようとするときに幕を閉じることになる。感慨無量なことである。

歩み来た道

名誉教授 松本壽吉

昭和四一年の夏に、九大教養部の藤本実雄さんが広大教育学部においてになつて、「九大教養部保健体育学科では、これまで第二次性徴期を中心とした身体発育と運動能力の発達に関する研究をすすめてきているが、その要因分析について、君の手を借りたいので、九大へ来てくれないか。」と誘われました。私も九大教養部の共同研究に魅力があり、一般教育の保健体育をやつてみたい気持ちもありましたので、この誘いをうけて、昭和四二年四月に九大へ転任してきました。

九大教養部には同窓の野口博敏さんと岡部弘道さん、広大出身の徳永幹雄さんがいたので、九大の雰囲気になれていきました。

九大に来て一年もたたないうちに、学内が騒々しくなってきました。それは、昭和四三年一月のエンタープライズ号佐世保入港反対の全学連学生が教養部学生会館を宿泊所にして、毎日早朝から佐世保へ出かけて夜福岡に帰ってきておりました。引続いて六月に、米軍フアントム機が建設中の電算機センターに墜落し、その後、一部学生集団による教養部本館の封鎖とその解除によるいろいろな事件が続きました。これらに対して、教養部を中心として、全学的に対策を立てて対処していきました。その頃の苦労は大変でしたし、その頃の思い出はいつまでも残っており、その時の教養部教官と、事務官が一致協力することに当つた姿は見事でした。教養部の授業の実施は一貫しており、研究にも全力を尽してきました。

一連の紛争が一応おさまつた頃、旧制福岡高等学校時代に建てられていた古い体育館に替わつて、新しい体育館が昭和四七年に完成

しました。この体育館の建設にあたってはいろいろな要求をしました。例えば天井の高さを十米以上に、床は桜か楓の板張り等でした。施設部ではこれらの要求をいれていただき、大変感謝しました。新体育館の完成を期して、すべての体育施設の使用規程を決めました。

なお一般学生の課外活動に野外スポーツのコースを企画して実施しました。最初は水泳教室でしたが、加えてスキー教室、登山教室を実施しました。これらの教室は、初心者を対象に、それぞれの基礎技術の習得と合宿生活の経験をさせ、将来のスポーツレクリエーションに役立てることをねらいました。水泳教室は大岳海岸のヨット部合宿所を、登山教室は九重筋湯の九大山の家を、スキー教室は大山スキー場の国鉄山の家を利用して実施しました。すべてのコースには学生部の援助をいただきました。

昭和四八年から大学の保健体育の在り方が中央教育審議会から改善すべきであるとの提言があり、これまでの保健体育の在り方どのように改善すべきかと問題が出されました。そこで九州地区大学では、直ちに研修会をもちながら体育連合を発足させて、具体的な検討をしました。

昭和五〇年には全国大学体育連合から、私を文部省海外派遣団の副団長に推せんされました。この海外視察は、フィンランド、西ドイツ、スイス、フランス、イギリス、アメリカの六ヶ国の施設の見学が有意義でした。

昭和五三年四月に健康科学センターが春日原キャンパスに設置されました。これまで同様、教養部の保健体育を担当しながら、健康の科学的研究をすすめました。

センターのスタッフは医学、心理学、社会学、体育学などの研究者で、健康を学際的、総合的に研究をすすめました。私たちの研究テーマは「健康診断指標の設定に関する研究」であり、センター発足から一〇年間この研究をすすめました。その後は健康生活の指

導に関する研究へ続いていきました。この研究成果は九大が開発しつつある健康外来のシステムの設定に役立てたものと考えられます。



大山スキー場 スキー教室



体育館ミーティング



由布岳 登山教室



体育館バスケットボール試合

旧制福高と教養部教授会

名誉教授 山口宗之

昭和四四（一九六九）年四月一日、教養部国史学担当助教授に採用されたわたしは居住地の久留米から国鉄電車で博多駅着、市電城南線に揺られて六本松下車、折しも満開の校庭の桜をみやりつつ玄関に入り教養部長岡田武彦教授に着任申告、ついで本館五階研究室に文学部学生時代以来の恩師西尾陽太郎先生にご挨拶をすませ、晴れて教養部教官陣の一員となった。以後平成二（一九九〇）年三月定年に二年残して私大へ去るまでの二一年間をこのキャンパスで過ごしたのである。文学部助手の任を終え九大を離れてから一四年三か月、わたしはすでに四〇歳になっていた。

はじめての教授会は四月九日（水）本館六階東端の第一会議室、専任講師以上の構成員は一五〇名前後に及んでいたが、公務出張その他で出席者は百名を少々越えるていどであったと思う。所属学科群にかたまらず自由に席を占め、卓上のワイヤレスマイクをとりあげて活発な発言、討議がなされた。

教養部教授会の特色は教授・助教授・専任講師の“身分”差にかかわらず発言、討議の自由さにあったと思う。白髪の長老教授が三〇歳そこそこの専任講師の舌鋒に手もなくやりこめられるのを、その後しばしば目撃した。それが何よりも鮮烈に発揮されたのは昇任人事であり助教授・専任講師も対等同資格で教授昇任の可否を票決したことであろう。九州帝大以来の遺風を堅持する各学部では考えられぬところであった。その所以・源流はどこにあったのであるうか。教養部在職中これをあきらかにしえないまま終わったが、その後旧制高校のことをあれこれしらべるうち、教養部六本松キャン

パスが旧制福岡高等学校の遺風をひきついだことにあるのではないかと考えるようになった。

周知のごとく旧制高校は明治一九（一八八六）年一高・三高の創設にはじまり、ついで明治期二・四・五・六・七・八のいわゆるナンバー校八校が誕生し事実上の帝大予科の使命を荷った。その後大正八（一九一九）年高等教育機関拡張に伴い、それぞれ設置の地名を名乗る新設高校が全国各地に相ついで出現、北海道・台北・京城三帝大予科をも合わせて総数三八校に達した。しかるに占領軍司令部の指令に伴って昭和二五年三月廃校となり、その施設、教官陣すべて最寄りの新制大にひきつがれて六〇年近く、最後のいわゆる一年修了生（中途打ち切りとなり新制大への再受験を余儀なくされる）も喜寿に達しつつある。

六本松キャンパスは大正一〇年設置の旧制福岡高等学校の故地であり、戦災にかからなかった風格のある木造本館をはじめ関連施設のほとんどが残っていて、わたしが着任したところかつて福高教授であられた先生方が各学科にかなりの数いられた。旧制高校をつらぬく精神―気風が自由・自治にあつたことは関係者の知悉するところであり、その遺風をなつかしむ気持が関係者の多くに今もなお尾をひいていること、否定すべくもない。さればこそ教養部教授会独特の“自由”も、おそらくは福高―旧制高校の伝統に根ざすものではなかったか、と推察するところである。

本館前に残る“乱舞の像”―腰手拭をうち振り代表寮歌「あゝ玄海」を絶叫する福高健児。九州にかつて存在した旧制四高校―五（熊本）・七（鹿児島）・佐賀のそれぞれの故地には開校当初の本館（五）寮歌碑（七）生徒像（佐）が今もなお屹立して若人の永遠のあこがれを伝えているのに対し、福高“乱舞の像”は六本松キャンパス閉鎖後、どこにいかなるかたちで永生しうるのであろうか。旧制高校（七高）出身者の一人として、心おだやかならぬ昨今である。

六本松・陸軍墓地内のドイツ兵の墓

名誉教授 赤間八郎

六本松交差点から九州大学キャンパスのフェンスに沿って南に歩いて行く。九大キャンパスが終わるころ左手に小高い丘が現れるが、これが旧陸軍墓地である。現在は福岡市の管理する谷公園という名前になっている。桜の木などが植えられて、ちよつとした緑地を形成している。九大の東通用口から徒歩五分という近距離にあるので、九大の外苑地区と言ってもよい。九大に在職していた当時は、桜の季節に昼の弁当を持って来たこともある。

旧陸軍墓地には大東亜戦争戦没者の碑など、いくつかの巨大な慰霊碑が建てられていて、明治維新から大東亜戦争に至る間、国に殉じた八、九五三柱の霊が祀られている。また、墓地の東南の隅にはドイツ兵二名の墓が二基、草に埋もれたまま静かに鎮座している。二基は同一形式の日本式墓石で、一五センチ角の石材を高さ一メートルの角柱に仕立てている。向かって左の墓には、ドイツ国海軍一等砲兵 ハイフリッヒ・ヴェルタの墓、大正四年（一九一五年）一月一五日福岡衛戍病院にて死す、と記されている。もう一つの墓は、石の風化が激しくて、ドイツ国海軍砲兵軍曹 フランツルー・チツクの墓としか読めない。

中国の青島（チンタオ）は、かつて、ドイツの植民地であったが、そこには要塞も築かれ、第一次世界大戦当時はドイツ東洋艦隊の根拠地として機能していた。要塞には守備隊としてドイツ海軍歩兵と海軍砲兵の各一個大隊が配置されていた。青島要塞は、一九一四年

十一月に日本軍によって占領されたので、二名の兵士は捕虜として日本に移送され、その直後に死亡したのであろう。

福岡とドイツの距離はおよそ九千キロである。故郷から遠く離れ、望郷の念に駆られながら、ここ福岡の地に没したとは、苛酷な運命であったと言わざるをえない。



陸軍墓地内のドイツ兵の墓

六本松の回想

名誉教授 宮原文夫

一・六本松で九大受験

六本松との最初の出会いは、一九五七年春の九大入試を受けた時である。一号館一階の教室だった。昼休み、運動場に面したベンチで弁当を食べ、参考書に目を通したのを覚えている。

二・教養部着任、学園紛争勃発

大学院を終え、福岡女子大に三年間在職したあと、一九六八年に六本松に着任した。然るに六月、箱崎に建設中の電算機センターに米軍機が墜落、宙づりになる。過激派学生がこれをアメリカ帝国主義の象徴とし、反米運動の狼煙を揚げ、機体引き下ろしを妨害した。彼らの本拠地は六本松だった。我々はこの問題を議論するクラス会議を開いた。箱崎にも動員され、電算機センターを取り囲む過激派と対峙した。

三・本館封鎖、解除、授業再開に伴う混乱

過激派は一九六九年三月には本館を一時封鎖。六月末に再度封鎖し、これは一〇月の機動隊導入まで続いた。だが封鎖解除後には更なる混乱が待ち受けていた。一月一〇日に授業を再開したが、彼らは、ストライキ中だと反発。授業をしようとする教官と、受けようとする学生と、妨害する学生との三つ巴の対立が続いた。

過激派は、授業をしようとする我々を裏切り者と非難した。それに対し私は「教官は授業をするのが当たり前。それをポイコットするのは学生の自由。教官が授業をしようとするから、学生はポイコットが出来るのだ。休講にすれば、そもそも授業がないのだから、ストライキもあり得ないのだ」と主張した。

あるクラスで、五人程の学生が出席していたので授業を始めると、一人の学生が入ってきて、教卓の私に面と向かって詰問をし始めた。警備の教官達が入室して見守る中、教養部長代理の上田教授が学生に退去命令を出す。学生は従わず、議論は更に続いた。そのうち私は、封鎖中の本館で学生が犯した非倫理的行為を指摘して強く批判した。すると学生は黙り込んでしまい、やがて、「出て行け」という私の言葉に従い、黙って出て行った。

この事件は毎日新聞一月一四日(金)夕刊に報道されているが、何故か教官名は、当日休講していた非常勤講師の名前になっている。年配の教授達から「勇氣ある貴方を尊敬します」と言われた。その結果は、やがて行われた学生委員選挙での見事な当選となり、頻りに過激派学生と対峙する羽目に陥った。私は教員の立場に徹して論理を展開した。彼らは「あいつは割り切ってるから、駄目だ」と立ち去ったり、論理を変えたりしたものだ。反動教官とされていたが、組合役員の経験が二度ある私は、今でも左派のつもりである。

四・学園平穩にもどり、教育と研究に専念

一九七五年頃から教育と研究に専念できるようになった。私の理念は教育と研究に平等な労力を注ぐことであった。一九七六年には文部省の英語教員英国派遣プログラムで二ヶ月間出張、応用言語学を学んだ。文部省からの出張証明書を提示して初めて外貨が購入できた時代である。一九八〇年には大学入試センターの英語出題委員

になり、二年にわたり頻繁に出張した。一九八四年には大学英語教育学会九州・沖縄支部を同僚らと設立、最初の事務局を六本松に置いた。支部の共同研究では学会賞も受賞した。

研究面では、一九八三年にアメリカ言語学会夏期講座で言語類型論に接し、この視点から英日対照の研究を始めた。教育と研究における充実した平穏な生活が嬉しかった。一九九二年には一年間の英国研修を許され、英語動詞の研究に専念。一九九四年からは比文の日本語教育講座で対照言語学を担当し、類型論的視点から日本語を論じた。動詞の研究では、相について英文の著書を発表。時制については「出来事の時間を表す」という通説を否定、「出来事に関する命題の妥当性の時間を表す」という説を立てた。これは一九九七年七月、パリでの国際言語学者会議で発表したが、この時は既に、六本松を定年退職して三ヶ月が過ぎていた。

三つの願い

名誉教授 押川元重

入学したのは一九五八年で、木造で新築されたばかりの田島寮に入りました。すぐに、周囲の学生がいろんなことを知っていること、特に、たかさんの本を読んでいることがわかり驚きました。大学生になると本をたくさん読まなければならぬのだと思い、もっぱら周りの学生から借りて、ヘーゲル、カント、マルクス、エンゲ

ルス、毛沢東、西田幾多郎といったところを中心に、がむしゃらに読みました。それも形だけで、実際は、書いてあることがさっぱり理解できなくて、字面を追っただけでした。それでも、読まない議論ができないという思いがあったため、読むのを止めるわけにはいきませんでした。時間だけはたっぷりありましたので、お腹をすかせながら夜遅くまで議論をしました。今思い出すと恥ずかしくなるようなめっちゃくちゃな議論が多かったようです。こうした六本松での二年間の読書と議論は私にとって得がたいものであったと思います。六〇年安保闘争の真っ只中に箱崎に引っ越しました。八年後に数学担当の講師として六本松に帰ってきたときは、大学紛争の真っ只中でした。大学内外で激動が続き、迫られる対応のために時間をとられましたが、そうしたなかで、専門分野が異なる多くの先生方と内容豊かな議論をする機会がたっぷりありました。一方では、数学を集中して考えていましたので、思い出深く充実した時期でした。大学らしい切磋琢磨の交流が伊都キャンパスで生まれることを期待します。

大学紛争も次第に落ち着いた頃、六本松地区に課外活動共用施設が建設されました。その施設にサークル室を仕切る壁を設けたのは約束違反であると、九州大学は文部省（当時）から指摘を受け、学生施設新設の予算をつけてもらえないでいました。そうした状況のとき、私は学生部長に選ばれ、この問題の解決に責任を負うことになってしまいました。幸いなことに、六本松地区の先生方に学生自治会等との交渉を重ねていただき、学生側の理解も得て解決に至ることができました。壁を釘やねじで固定するのはだめだということで、壁に足をつけて動かないようにしたのが解決策でした。せっかく問題は解決したのに、キャンパス移転が決まったため学生施設の新設がストップしたという経緯を考えると、伊都キャンパスに立派なサークル施設ができることを強く願わざるを得ません。

教養部はできたときから問題を抱えていました。その解決のために「教養学部」をつくるのが教養部教授会の願望でした。しかし、その望みは無くならず、しかも、他の大学で次々に教養部廃止が進んでいるなかで、私は教養部長に選ばれました。結局、教養部は一九九四年に廃止になりましたが、教養部廃止へ向けた文部省（当時）との話し合いのなかで、文部省の担当者から、「九州大学が教養のない卒業生を出せば、日本はどうなりますか」、「本格的な専門は大学院で、学部は教養と専門基礎を」、「教養部が無くなるのでなく、全学で教養教育をしっかりやる体制をつくってほしい」と言われたことを忘れられません。教養教育の軽視が教養部廃止の目的であったと、いまだに誤解している人がいることは残念です。旧制福岡の同窓会はその存在を記念する物が六本松に少しでも残ることを願って活動していますが、教養部は旧制福岡よりも長い歴史を持つにもかかわらず同窓会が無いので、そうした動きはありません。このことは通過組織であった教養部の位置づけの本質を示すものです。伊都キャンパスにおいて全学が協力したいっそう充実した教養教育が実現することを願います。

六本松キャンパスの回想

名誉教授 加藤久子

私は一九五九年（昭和三四年）四月、九大理学部数学科の新入生として初めて六本松キャンパスに立ちました。未来を空想しながら

何か私に合った職業を見つけて生涯を通して働きたいと願っていました。

しかしながら教養部の頃よく勉強したという実感はなく、それかといってよく遊んだとも言えないのです。単位に余裕がありましたので定期試験は受けるつもりはないまま、「社会思想史」を受講しましたところ、この授業の先生が奥田八二先生でした。ある授業時間のこと、次のように問われたのでした。「海に大きな一つの船があった。船の中では人々が勤勉に働いていた。彼らは誰も気づいてはいなかったが、その船は実は海賊船であった。この勤勉さにはどのような意味があるのか。」ようやくテレビが各家庭に普及し始めた頃でその時の私はまだ社会問題に関して真剣に考えた経験は全く授業内容はすっかり忘れましたが、この「海賊船の中の勤勉さ」だけは鮮明に心に残りました。

理学部の学生としてではなく、数学科の学生としての入学は三四年度から始まった制度です。新制度スタートの数学の授業は、金田董先生がご自分で原紙を切られ謄写版で印刷されたものを毎時間配布され、独創的なものでした。高校の数学とは異なって、論理正しく徹底的に考えようとする大学の数学が私の性に合っていました。この時頂いたプリントは学部に進学した後も何回も読み、文字や記号が薄くなった今も大切に本棚に置いております。

時が流れ、一九六八年（昭和四三年）私は今度は教養部教官として六本松キャンパスに来ました。この時大きな研究課題を持っておりまして、それは、流体力学を基盤とする「ナビエ・ストークス方程式」と呼ばれる偏微分方程式の数学的解明、もっと具体的に言えば「解の一意存在問題」です。その後、私には実力不相当な問題と分かってきましたが、この問題を研究課題の中心に置き続けました。その頃、研究時間や研究費が限られていましてほとんど教養部学生の教育に関する時間となっていました。このような状況で、途方も

無い困難な研究課題をもつことは、実りの無い選択と言えるかも知れませんが、限られた授業時間の中で何を教えて何を教えないかを精選していく上での指針となり、私の研究生活の道標ともなりました。この問題はずっと後の二〇〇〇年という節目にきて、アメリカのクレイ研究所が数学の発展を期待し、おのおのに百万ドルの懸賞金を提供して選んだ「数学の七つの未解決問題（この中の一題は最近解決された）」の一つになりました。

教養部教官から、制度改革の後は数理学研究院の教官として定年退職までなんと三六年間を六本松キャンパスで過ごしました。いつの間にか「ナビエ・ストークス方程式」の解の一意存在問題に関し私独自の考え方に到達し、研究費も改善され海外での研究発表の道が開かれました。学問の発展に貢献しようと研究の日々を過ごされている人の中で共に働くことができましたことに、この上ない幸せを感じております。

退職後、カルチャーセンターの俳句入門教室に通い始めました。

一冊の本をリュックに青き踏む

さらなる飛躍を

名誉教授 有村隆広

伊都キャンパスへの移転は私が在職していた一九八〇年代から話題になっていた。当時、ことによると私も定年前に新キャンパスに

研究室を持てるかもしれないと考えたこともあった。その後二〇余年を経て、新キャンパス移転が終いに実現することになり、心から祝福したい。定年の一年前、教授会で当時の部長が伊都キャンパスの見取り図、設計図等について説明され、その後質疑応答がなされた。私は年齢も忘れ、いろいろな質問し、提案さえした。私の質問時間が長すぎたためか部長は、「定年間近かの人でさえ熱心に論じられています。近い将来確実に移転できる皆さんも大いに意見を述べてください。」と発言された。しゃべりすぎたかな、と一瞬恥ずかしくなったことを記憶している。その部長も定年で六本松を去って行かれた。

一人の人間の一生は短い。しかし、その人間の集団が作り出すエネルギーと英知は永遠である。伊都キャンパスへの移転もしかりである。先日、「大学文書館ニュース、第三〇号」をいただいた。その表紙の写真は「九大フィルハーモニー・オーケストラ」の演奏スナップで、一九二四年（大正一三年）撮影されたものである。私が生まれる二二年前である。この写真をみても、九州大学の歴史はその時々の大人が営々と築いてきたものであることが理解できる。人間は歴史を継承し、それを発展させる。伊都キャンパス移転もまさしくその証である。

私は一九五七年（昭和三二年）九大に入学し、一年半六本松の教養部に在籍した。文学部の博士課程の途中から山口大学に助手として転出し、五年間勤めた。その後三二歳の時に再び九大に帰ってきた。二度にわたるドイツ留学の期間はあったが、六三歳の定年まで三二年間、六本松キャンパスでドイツ語・文学を教えた。したがって六本松キャンパスで学生として一年半、教師とし三一年の計三二年半、お世話になった。ところが定年後八年を経た現在、教師としての三一年間よりも学生としての一年半の印象が強烈である。なぜそのように感じるのだろうか。

その一つは入学当初、六本松キャンパスが有する澁刺とした自由奔放な雰囲気であり、同じ志を有する友人たちに出会えたことであつた。他の一つは教養教育（共通教育）の講義を積極的に受けたためであると、最近強く感じるようになった。

五〇年前は、語学、体育のほか、一般教育科目として人文科学、社会科学、自然科学がそれぞれ二単位、選択必修であつた。それまでの高校の授業はどちらかというと受験を目的としていたので、ある種の義務感があつた。ところが大学の講義は、ゆつたりとして、開放的であり、本人の自主性が重んじられていた。しかし同時に学問の本質とその広がりや何となく感じさせるものがあつた。

私は入学当初からドイツ文学を専攻しようと考えていた。教養科目を履修出来たお陰で、専門課程に進学する前に、他の学問一般についての広い知識分野をおぼろげながらも理解できた。このことは、教養課程における最大の成果のひとつであつたと思う。なぜならば、自分が勉強しようとしている分野の方向性が一層明確になつてきたから。二〇世紀の文学を代表するドイツの作家、フランツ・カフカは、「ある大切なことを学ぶには、それと関係ない本をひたすら読むことです。」と述べている。彼の発言は一種の逆説であるが、一般教育の理想の一端はカフカのこの発言にも示されている。

五〇年後の学生たちにもこのことは意識しなくても身につけていると思う。在職当時、理系の上級クラスの学生たちに、理系論文と文学作品のいずれを読みたいかと訊ねたところ、圧倒的に小説を読みたいという答えが返つてきた。専門に関係することは進学してから十分出来るので他の分野を学びたいということであつた。また、退職後三年間、少人数ゼミを担当させていただいた。最初の一年間は暗中模索であつたが、二年目から思い切つて私の専門分野に近い「文学作品における主人公とモデル」というテーマのゼミを行なつた。受講生は文系、理系の全般にわたり、学部の壁を越えて全員皆

非常に熱心であつた。すべての学生にレポートを提出させ、発表させたが、主人公の運命に共感し、感極まつて涙声で発表する学生たち、また主人公の行動に悲憤慷慨する学生たち、彼らは様々な真摯な反応を示していた。学生たちのほとんどは文学を専攻してはいなかつたが、これほど熱心にゼミに参加したことは、彼らにとつては私が五〇年前に経験したことと同じ思い出となることであろう。まさしくこれは教養教育（共通教育）の成果の一端であるといえる。

伊都キャンパスでもこのような情景が続出し、学生たちがのびやかに成長していく姿が目に見えるようである。

新任教員ドタバタ日記

名誉教授 横田耕一

一九六八年四月 一日から九大教養部に着任。社会科学教室に所属し憲法を中心に講義することになる。「かつては教室のテーブル上には喫茶店のマツチがあつたのに今では……」と嘆く母親役で事務担当の大西さん、長老格の「ロングアゴー」で話も長い川口先生、一晩で原稿を書き上げる精力的な奥田先生、温厚な紳士で講義で笑いの起る大原先生、クリスマスには東ドイツからケーキが来る趣味人の小島先生、古文書解読の権威で酒が入ると説教を始める中村先生、その弟分にあたり酒が入るとめっぽう勇ましくなり学生に圧倒的人気で「学者はプロ野球の選手ではなくプロの相撲取りになら

ねば」と訓示される執行先生、怒りっぽいがダンディーで頼りになる兄貴分的存在の深山先生、調整役でどっしり構えているがどこかズッコケル徳本先生、東奔西走の社会活動の一方で新人に懇切なアドバイスをされる衣笠先生、超豪華音楽再生装置を書斎に構える直先輩の船木先生、温厚で「イケメン」だが芯が強く信頼できる原田先生、「カッコいいこと言う奴は信用するな!」とカッコいい斎藤先生、この人たちがめつぼう雰囲気の良い教室の構成員だ。

一九六八年五月 米軍のファントム機が建築中の電算センターに墜落。学内は騒然となり、総長を先頭に天神までのデモが繰り返される。学内に「ジェット機懇談会」が作られ委員となるが、もっぱら抗議の仕方やデモの計画などが話し合われる。七日は学生の全学ストで休講。

一九六八年一二月 墜落機の処理などをめぐり学内諸セクトの対立激化。一〇日には反帝と革マルがゲバ寸前となるが、二四日には箱崎でとうとう本格的ゲバがはじまり、電車道をはさみ両派対峙。教員はそのたび待機で消耗。

一九六九年三月 入試二日目の三日早朝、中核派が教養部本館を突如封鎖、入試不可能となる。中村先生とともに指導者のOと交渉し入試関係書類を引き渡してもらい英数学館で入試継続。こうしたときなぜか人は走る習性があるのか、中村先生とともに受取った書類箱をもって小走りしたが、その姿がバッチリとTVカメラ等でとらえられ恥!。中核派の封鎖は二日目で継続し、この間教員は交代で学内の別建物に泊まりこみ、深夜に何度か本館外を周る。パトロールを繰り返す。馬鹿馬鹿しいかぎり。

一九六九年五月 「大学立法」反対をととなえ、二二日、学生たち全学スト突入。これ以後正常に授業は行われず、「自主講座」が繰り返される。

一九六九年六月一八日 最初の「大衆団交」行われる。午後三時

からはじまり翌朝七時まで継続。壇上に同席する我々もきついが、矢面に立つ部長・評議員はたまったものではなからう。(九大の闘争の場合、九大、ましてや教養部独自では対応できない課題が獲得目標になっているので、これ以後大衆団交が繰り返されても不毛で、夏休み期間に入ってから、学生が集まらないとかで七月九日以後開かれることはなかった。)

一九六九年六月二八日 本日午後開かれる予定であった大衆団交を、学生側交渉者の資格に疑義ありとして教授会が直前に拒否。学生、六階の教授会開催室に押しかけた後、本館をバリケード封鎖。これ以後教授会は、西島ビル、福祉会館、平和台セミナー、合屋外科、警固神社などで学生の目を逃れて開催される。宿直、パトロールも復活。

一九六九年一〇月一二日 警固神社で午後一時より開かれた教員会議、くだらぬ議題で時間をつぶし、皆が疲れきった七時前、突然、明日の機動隊導入による封鎖解除がはかられ、激論の末、賛成七二・反対二七で封鎖解除を決定。やんぬるかな。社会教室も賛否に分裂。川口先生が両者を某所に招待、険悪な状況を収める。この日で新任教員気分は完全にふつとんだ。